

日吉丸雅櫻

三の切

一二

〔解題〕 享和元年十月四日から北堀江市の側の芝居（座本豊竹時太夫）で興行。作者は近松やなぎ・近松加造・近松萬壽・近松梅枝軒である。

数ある太閤記種の一つで、日吉丸の出生より桶狭間の合戦に至る迄の間の事を材とし、殊に木下藤吉が堀尾茂助の案内で間道から進んで齋藤龍興の居城である稻葉山の城を陥れた事、清正が鍛冶屋の倅であつたが母の縁で秀吉の許に人と成つて武名を顯す事を主題として脚色したもので、番附及び正本表紙見返しに示した場割りには次の通りである。（發端）竹生島（此間三年たつ）今川館、日吉丸誕生、千僧供養、春長出陣（此間十三年たつ）〔初段〕壺割、土橋、茶碗屋（此間十六年たつ）〔二段目〕八幡、松下屋敷兵法、東吉部屋（三段目）蘆原、鹿狩、割普請、大手口、花壇（四段目）道行洲股、陣屋、熱田の社、つゝじが嶽（五段目）桶狭間の段から成る。その中では初段の切、三段の切、四段の切などが名高く、殊にこゝに收めた三段の切が山である。

茶碗屋源左衛門の義子源太郎は小田春長の駒木山城を預る木下藤吉に召抱へられて堀尾吉晴と名のつて侍とな

つたので、その妻のお政は父の鍛冶屋五郎助や母や弟の竹松と共に尋ねて来て、城の大手口で吉晴に出逢ふ。この時五郎助は故主齋藤明舜の女萬代姫が春長に嫁したが此の駒木山城に押籠同然で暮して居たのに春長は今宵藤吉に命じて首を討たせるといふ事を立聴きして、奪ひ出さうとして、城内の花壇の邊迄忍び寄つた處を吉晴に捕へられ、こゝで始めて城主藤吉に對面して、昔色々世話をした猿之助であつたのを知つて奇遇に驚き、又茶碗屋源左衛門を殺した事も述べするので吉晴は始めて舅五郎助が義理ある親の敵と知つて驚く。五郎助は藤吉に折入つて頼み度い事があるといつて連立つて奥へ行く、こゝ迄が三段目の花壇の段の口で、これから、こゝに收めた切になるのである。俗にこの段を「五郎助住家」といふが、それはこの一段のみを切放して呼んだ誤りで、丸本によつて見れば、舞臺は駒木山城中である事は明かである。

へこそは入りにける。散る花の。別て。お休みなされ遊ばしたら。自らは叶はぬ縁と締めよと。地立上る裾引き
れを暫し慰むる。程とや春の名残とは。然るべう。地存じますると慰勉に。武とどめ。マアく待つて下さんせ。詞
知らぬお政が千鳥足。詞オ、こちの人家の三つ指手はもちく。ア、フシ辛。最前からのあらましは。襖の陰にて聞
爰に居やしんすか。春の夜寒に酒一氣やと寄添へば。地吉晴は取つて突退きました。地とは言ひながら情ない。
つたべ過ぎて。オ、暑やのホ、、、。け。詞女房去つた縁切つたぞ。エ、語。長地過ぎし逢ふ夜の醉言を。身に沁々
私とした事が滅相な。今までの源次郎るに及ばぬそちが素性。五郎助殿が手と片時も。タ、キカ、リ思ひ忘るゝ際もな
様とは違ふ。久吉様の御家來。堀尾茂にかけられし茶碗屋の主源左衛門は。う。年月隔つ其内に。移り易きは殿御
助吉晴様。侍の女房が。こちの人どう我が爲には義理ある親。殊には隔つ敵の心。若しや見捨てはなされぬかと。
さしやんせとは言はれまい。今から行味方知らぬ内は兎も角も。知つては片ほんにあらゆる神様や。佛様まで無理
儀改めて。わが夫にはお居間へござつ時も添ふ事ならず。暇の印はこの一腰。いうて。案じ暮した甲斐もなう。添は

れぬ義理の離別とは。あんまりむごいも。スエテ手負ひに取付き勞はれば。お政は苦しき顔を上。母様堪へて下さんせ。思ふ夫に見放され。冥途の道をうろく。と。嘸や迷ふでござりませう。親に先立つ不孝の罪。赦したべと手を合はし。フシ啣く歎くぞ道理なり。強やとふし沈めば。五郎助は聲あら。父の敵は汝が親。縁につながる茂助に合はし。フシ啣く歎くぞ道理なり。強やとふし沈めば。五郎助は聲あら。政が突詰めし。女心の一筋に。スエテが立籠つたる。稲田山の城廓は。凡そにやうて何とせう。可愛さ餘つて縁を方涙なく。斯くと覺悟は夫の魂。東國第一の名城。一夫是を守らば萬卒切。智に知らせし稲田山の問道イヤ。抜き手も見せず我と我が咽にがはと突。破り難き堅固の要害。この城を落すに。サ我が子の勘當。堀尾茂助吉晴殿。篤立つれば。驚く茂助母親も襖あらはに。音を。心の當途に谷へ下り。水に従ひする五郎助が。恩義を範めし一言に。轉び出で。ナウ何故の自害ぞや。早まつた事しやつたなう。調コレ。五郎助殿。娘が自害しましたと。堀明くるはこゝ一つと。堀智の堀尾に餘所がより聲高く。調ヤア。齋藤明舜が障子の打寛ぎ。竹松膝に抱きかへ。知らず問道聞取る吉晴。敵を攻討改めて。對面せんと。地名智の一聲鶴我が子の最期に目もやらず。煙草すばつ味方の英氣。フシ開くる武運と心の間の。襖左右へおし開かせ。フシ悠々。騒がぬ五郎助。母は詮方なく。悦び。母は何の氣もつかず。調コレ

然と歩み出で。五郎助に打向ひ。詞孔子も我が子に後れては。思ひの火を胸に焚く。肉親の娘が恩愛に惹かれ。又二つには。齋藤の傾く運の未然を察し。稲田山の間道を教へたる身の誤りと。古主への言譯に。命を捨つるは天晴れく。ホ、推量の如く。齋藤の恩祿を喰ひ込んだる此五郎助。ガ一命を捨てたとは。イヤ隠されな五郎助。五音はづれし音聲にて。久吉疾くより承知致した。ア御心勞の程察し入る。堀と大地を見抜く木下が。詞に五郎助張詰めし。心弛んで思はずも。苦しき息をほつと突き。天晴れ明智の久吉殿。古主の無道を見限りし。拙者が覺悟御覽あれと。堀肌おし脱げば血汐の腹帯。朱に染めなすッからくれなる。堀見るに驚く手負ひより妻はあるにもあらぬ思ひ。ナウ情ない五郎助殿。可愛我が子

を先立て、便りなき身のその上に。こなたに別れ何とせう。命を捨てずとどろぞマア。仕様もやうはない事かと。縋り救げば竹松は。頭是なき身もおろせ。聲。父様も姉様も。なぜ一時に死なつしやる。堀坊も殺して下されと。堀心の老行心。聞く五郎助は顔眺め。詞オ、しをらしい事よう言うたな。サア吉晴殿。勘當すればこの五郎助とは。赤の他人のその女。誰に憚る事やあらん。女房に持つて下さるか。ホ、ウ勘當ありし其上は。最早縁なきこのお政。未來永々一つ連。半座を分けて相待つべし。エ、忝い。あれ聞いたか娘。ではないコリヤ餘所の女中。アイ其お詞が智識の引導。堀先立つ此身の經陀羅尼。さは言ひながら勿體ない。親の御

い。母様弟吉晴様。未來は女夫でござんすぞえ。堀せめて別れににしと顔見て死にたいわが夫と。苦しき體を這寄つて。ちつと見かはす目の内に。盡きぬ妹脊の名残の涙ッ餘所の。見る目もいぢらし。堀何思ひけん五郎助は娘の首を討落せば。是はとばかり驚く人々。茂助は手負ひに詰寄つて。詞血迷はれしか五郎助殿。とても助からぬ女なれども。首を討たれし所存はいかに。ホ、ウ賤しき鍛冶の職人とは成り果つれど。元は齋藤明舜が家臣。加藤忠左衛門清忠。血迷ひしとは何の戯言。サア木下藤吉殿。齋藤の息女萬代姫が首。心を定めて實檢あれと。堀我が子の首を引寄せて。差出す老の岩乗が子の手負ひより妻はあるにもあらぬ思ひ。ナウ情ない五郎助殿。可愛我が子

情お慈悲の御勘當。あんまり冥加恐し方へ。切りかけられし妙策頓智。久吉遠

愛の詞に悦ぶ手負ひ。虎之助はにこ
顔。詞アノ殿様の家來になれば。
今からおれは好きの侍。軍に行つたら
大將の首。幾つも切つて見せう。
父様見て居て下されと。地聞くも涙の
深見草。花壇の蔭に最前より。忍び込
んだる永井早太。物の具堅め踊り出で。
調ノ。稲田山の間道を告げ知らしたる鍛
冶屋五郎助。味方の陣へ注進と。地駈
出す早太吉晴が。立切る切戸虎之助。
調久吉様へ奉公始め。目に物見せんと
立上り。地ヲシ飛んで降り立ち庭先の。
苦むす石に手をかけて。目より高く差
上ぐる。希代の小兒が金剛力。打付け
られて早太が最期。ヲシ微塵になつて
死してけり。地堀尾茂助つつ立ち上り。
調稲田山の間道を聞取つたるこそ究竟。
一。イデ搦手より攻入つて。只一戦に
かけ崩さん。御用意あれとせき立つ吉
晴。ア、イヤ。稲田の城廓は袋の
内の鼠同然。久吉が手裏にあり。先づ
さす敵は今川義元。討取る術ぞ肝要な
らん。ハ、ハ、ハ、げに尤も仰せの如く。
目に餘つたる五萬餘騎。僅か味方の小
勢にて。勝利を得るの術やいかに。ホ、
ホ、それにこそ計策あり。この桶狭
間の戦ひは主人小田家の一世の職業。
丹下中嶋善祥寺。地驚津丸根を始めと
して。七箇所砦を築き變に應じ機に
乗じ。見よく今に義元が。首捉ぐる
は隣く中コレ。氣遣ひ無用とヲシ軍
師が金言。地イザ本城へ出立せん。正
に残しける。